

埼玉県鴻巣町常光村連合耕地整理小史(1) —農業開発における農民、町村、政府—

わたぬぎ 良秀
四月朔日

1 序

耕地整理は整理地区内の土地所有者の共同投資であり、耕地、灌漑排水施設、道路等の改良、土地改良である。そして、近代の耕地整理は近代的農業土木技術、測量、設計等の新技術の農業への導入であった。また、明治32年公布、翌33年1月施行の耕地整理法は重要な制度革新であったと言える。耕地整理、土地改良は明治以降の農業発達において品種改良、肥料増投等とともにその重要性が指摘されている。しかし、個別の耕地整理の歴史、実施過程の研究はその重要性に比して少ない。本論文は耕地整理法下の有名な埼玉県北足立郡鴻巣町常光村連合耕地整理（工事明治35年3月—5月）の歴史、実施過程の研究であり、共同投資の決定である発起、工事、投資費用と便益の分配である費用負担と換地、金融等と、それらの特徴、発生した諸問題に接近したものである。

最初に2耕地と農業で耕地整理当時の鴻巣町と常光村の耕地、特に水田の状況と農業の状況を見ておく。次に3政府と農会の耕地整理政策で県郡政府と県郡農会の耕地整理に対する補助、援助策を見ておく。以上が鴻巣町常光村連合耕地整理の背景をなす。次いで、鴻巣町常光村連合耕地整理の時間的経過に従い、4耕地整理の発端から発起届書提出、5発起届書提出から発起認可申請、6整理地区外反対から発起認可、7創業総会から工事施行までを叙述する。また、8工事竣成後で竣成後の歴史を耕地と農業の状況を中心に簡単に述べる。そして、重要な事業である9換地と地価配分、10金融と費用負担を分析し、11鴻巣町常光村連合耕地整理の評価に至る。

2 耕地と農業^{注2-1}

2-1 位置と地形

鴻巣町常光村連合耕地整理（以下、鴻巣常光耕地整理と省略）地区は高崎線鴻巣駅東方、蛇行しながら高崎線とほぼ平行に流れる元荒川の右岸に広がる矢の根石形の地区である。整理地区は大宮台地の北部で、耕地の大部分の土質は第4紀新層の植土であり、1部は第4紀古層の植土であった。整理地区の地形は、整理地区の周辺部は高く、特に鴻巣市街地に近い西方周辺部と元荒川沿いの東方周辺部が高地であり、中央部は低地であった。しかし、小さな丘と小さな谷の起伏する地形であり、特に鴻巣町と常光村の境界（鴻巣加須道）は自然の高丘であった。

2―2 耕地と灌漑排水

鴻巣常光耕地整理地区の耕地、特に水田の耕地整理以前の状況をみておこう。

整理地区の灌漑排水施設は極めて劣悪であった。用水路は元荒川から取水する谷田用水路と子守堀用水路があったが不完全であった。悪水路（排水路）は用水路としても利用され、堰、高所等で滞水し、湿田、深田の原因となっていた。また、道路も屈曲し、特に耕作道が不足し他人の水田の畦畔を越え櫓で肥料、収穫物等を運搬していた。また、水田は不成型でもあった。

谷田用水路は元荒川の1町7村の水田を灌漑する宮地堰から取水し、二ツ樋を通過して整理地区の西北端で流入し北から南に屈曲し、整理地区の西部、鴻巣町と常光村の水田を灌漑し、整理地区外の中丸村に流出した。谷田用水路は屈曲し、高所があり不完全であった。谷田用水路は「……用水路ノ上流ニ於テハ用水常ニ溢出スルヲ以テ下流ニ至テハ用水不足ヲ告ケ争論常ニ絶ヘス従来此ノ用水ノ上流鴻巣町ニ対スル下流ノ常光村中丸村ノ間（交一筆者）際ハ常ニ円滑ヲ欠キ村治上ハ勿論私交上ニ於テモ円滑ナラサリシハ事実ナリシナリ^{註2-2}」と述られている。

子守堀用水路は元荒川の笠原堰より取水し、整理地区の東南部を灌漑し、悪水路の圪上堰で悪水路に合流した。しかし、往時には子守堀用水路は悪水路を伏越または掛樋で通過し、整理地区外南方の常光村大字常光、加納村の水田に灌漑していたが、耕地整理当時には伏越の痕跡が残るのみであった。したがって、大字常光と加納村の水田は悪水路の大塚堰と圪上堰により灌漑していた。子守堀用水路は幅員が狭小で深く、水面が低く不完全であった。

悪水路は用水にも利用される悪用兼用であったが、整理地区の西北端で二ツ樋を通過して整理地区に入り、整理地区の中央を流れ、元荒川に流出していた。しかし、悪水路は分流、合流をくり返した。特に鴻巣町と常光村の境界（鴻巣加須道）は自然の高丘で悪水の流下の障害となっていた。また、悪水路には大塚堰、圪上堰が設けられていた。その結果、高所や堰の上流の水田は悪水の停滞にみまわれた。「……当整理地区ノ排水路ハ最モ不完全且ツ用悪水兼帯ニシテ停滞水絶ユルコトナク一旦降雨アルトキハ恰モ沼地ノ状態ヲナス……^{註2-3}」と述べられている。

その結果、耕地整理地区の耕地、水田の状態は劣悪であった。水田は湿田、深田であった。「……其ノ地区内ノ田地ハ終年乾燥スルコトナク畑地ト雖トモ地下水耕土ト接近シテ植生ニ有害ナリ加フルニ降雨連日ニ亘ルトキハ停滞水稻苗ヲ没シ数百町歩ノ青稻ヲ腐敗ニ帰セシムルコト常ナリシナリ……^{註2-4}」と述べられている。

耕地整理地区の県道、里道は屈曲が多く、また、両側の滞水による路肩の崩壊の為に路面の広狭が一定ではなかった。特に、耕作道は極めて不十分であった。「……人家付（近一筆者）ノ所ニ於テハ数多ノ道路アリト雖トモ耕地ニ至ルニ從ヒ中絶スルモノ多シ……（中略）……殊ニ肥料収穫物ノ運搬ノ如キ幾多他人ノ田地ヲ通過シテ運搬セサルヲ得サル以テ誠ニ不便ノ土地ナリシナリ……^{註2-5}」と述べられている。また、湿田、深田でもあり、櫓を利用していた。

耕地整理地区の周辺部の高地は人家、田、畑が錯雑していた。これらの水田には排水路がなく、常に悪水が停滞していた。

2―3 耕地所有と農家

鴻巣常光耕地整理地区の耕地所有と農家の状況を見ておこう。鴻巣町と常光村の耕地所有と農家の統計が第2―1表から第2―3表である。統計は明治40年末および中丸村大字深井を除く耕地整理

第2-1表 耕地自作地・小作地（明治40年末）

（単位 町）

	総 計			自 作 地			小 作 地		
	田	畑	計	田	畑	計	田	畑	計
鴻巣町	93.3	225.0	318.3	53.6	154.7	208.3	39.7	70.3	110.0
常光村	221.2	202.0	423.2	123.2	142.3	265.5	98.0	59.7	157.7

資料：埼玉県北足立郡農会編『埼玉県北足立郡事一班』p. 47。

第2-2表 規模別耗地所有（明治40年末）

（単位 人）

		5反以下	5反以上 2町以下	2町以上 3町以下	3町以上 4町以下	4町以上 5町以下	5町以上 10町以下	10町以上 15町以下	15町以上 20町以下	20町以上 30町以下	30町以上 40町以下	40町以上	計
田	鴻巣町	124	42	5	1	2	1	0	0	0	0	0	175
	常光村	35	45	41	9	8	1	1	1	0	1	0	142
畑	鴻巣町	369	81	8	5	1	6	1	0	0	0	0	471
	常光村	225	40	25	6	5	1	1	1	0	1	0	305

資料：第2-1表に同一 pp. 51、54、55。

第2-3表 自作農・小作農（明治40年末）

	農家戸数（戸）			農 業 人 口（人）						
	総戸数	自 作	小 作	総人員	自 作 農			小 作 農		
					就 業	不就業	計	就 業	不就業	計
鴻巣町	190	60	130	1,019	250	119	369	455	195	650
常光村	329	194	135	2,205	760	573	1,333	500	372	87

資料：第2-1表に同一 p. 59。

地区を含むより広い地域の統計である。明治40年末の鴻巣町の現住戸数は1003戸、常光村の現住戸数は325戸であった^{注2-6}。ちなみに耕地整理地区の土地所有者は452人であった。しかし、統計は明治35年当時の鴻巣常光耕地整理地区の状況と大きな相違はないと思われる。

鴻巣町の田所有者の平均面積は0.53町であった。田5反以下層が田所有者の70.9%と大多数を占め、また、田5反以上2町以下層が24.0%を占めており、2町以下の田所有者が94.9%と大部分を占めていた。2町以上の田所有者は少数であり、10町以上の田所有者は存在しなかった。畑所有者は田所有者よりも多数で、その平均面積は0.48町であった。畑5反以下層が畑所有者の78.3%と大多数を占めていた。鴻巣町の土地所有者は比較的小規模所有が多かった。田の自作地53.6町、57.4%を占め、小作地は39.7町、42.6%を占めていた。畑の自作地154.7町、68.8%を占め、小作地70.3町、31.2%を占めていた。また、鴻巣町の田所有者175戸に対し、自作農が60戸で、約100戸の耕作に従事しない地主が存在したと推定される。鴻巣町の農家190戸、自作農60戸、31.6%、小作農130戸、68.7%と小作農が多く、平均田耕作面積0.49町と小規模であった。

常光村の田所有者の平均面積は 1.56 町であった。田 5 反以下層が田所有者の 24.6%、田 5 反以上 2 町以下層が 31.7%、田 2 町以上 3 町以下層が 28.9% を占め、田 3 町以上の所有者は 14.8% を占めていた。畑所有者は多数で、平均面積は 0.66 町であった。畑 5 反以下層は畑所有者の 73.8% と大多数を占めていた。常光村の土地所有者は鴻巣町に比較して大規模であった。常光村の田の自作地 123.2 町、55.7% を占め、小作地が 98.0 町、44.3% を占めていた。また畑の自作地 142.3 町、70.4% を占め、小作地が 59.7 町、29.6% を占めていた。また、常光村の田所有者 142 人に対し、自作農が 194 戸であり、耕作に従事しない地主は少数であったと推定される。常光村の農家 329 戸、自作農 194 戸、59.0%、小作農 135 戸、41.0% を占めていた。また、農家平均田面積 0.67 町、畑面積 0.61 町であった。

したがって、耕地整理当時の鴻巣町の市街地近郊地域の兼業農家は「……現今耕作面積平均田畑三反三畝歩余ニ過キサリシ……^{註2-7}」であり、農村地域の鴻巣町の 1 部と常光村の専業農家は「……此地方一農家ノ耕作地ハ田畑合計一町歩内外ナリ……^{註2-8}」であった。

2-4 農民の耕地と農業への態度

鴻巣町の整理地区の農家は小規模な兼業農家が多かった。農家は副業に白木綿等の織物業を行っていたが、織物業の一層の発展により、織物業を主(本)業とし、農業を放棄するものが出現した。また、賃金は騰貴した。当時肥料も比較的高価であったこともあり、農業経営は振わず収支がとれなかったと言われる。それらの結果、地主は「……漸次ニ小作者ヲ夫ヒ從テ小作料ノ逋減ヲ強請セラレ地主ノ困苦名状スヘカラサル境遇ニ陥リ……^{註2-9}」。また、自作農も農事改良に熱意なくほとんど農業を嫌悪する状態であった。有志が町農会を明治 26 年に組織化を始め 28 年に設立し、耕種改良方法、土質改良を唱導したが成果はなかった。

農村である常光村の整理地区の農家は比較的大規模専業農家が大部分を占め、また、比較的自作農が多かった。耕地、水田の状態が劣悪であり、農家をとりまく状況は厳しかった。その結果、「……小農ノ如キハ農業ヲ棄テ、他業ニ遷リ從テ土地ノ余剰ヲ見ントスルノ傾向アルヲ以テ数町歩ヲ所有スル地主ノ如キハ小作料ノ逋減ヲ強請セラレ之ヲ拒絶センカ遂ニ小作人ヲ失ハントスルノ苦境ニ陥レリ……^{註2-10}」との状況であった。

農民の農業への態度について「……鴻巣常光共ニ湿田多ク冠水スルノ恐リアルヲ以テ農家ハ常ニ土地愛護ノ念ニ乏シク從テ肥料ノ施用不十分ニシテ一般農事ノ改良モ亦熱心ナラス……^{註2-11}」と述べられている。

3 政府と農会の耕地整理政策

政府、農商務省は耕地整理法を明治 32 年に公布し(翌 33 年 1 月施行)、耕地整理を強力に推進した。また、耕地整理施行規則等耕地整理に関係する法律、省令、訓令等の整備、改正を行った。その後も発生した重要問題に対応し、法律等の整備、改正に努めた。耕地整理の実施には以前には整理地区の全土地所有者の同意が必要とされたのに対し、耕地整理法により 3 分の 2 以上の土地所有者、総面積および総地価の同意により耕地整理の実施が可能となった。この耕地整理法により耕地整理の実施の方法、手続等の制度が明確に確立された。但し、この耕地整理法は費用負担、換地等

の方法は各耕地整理に委ね、規約書に規定することとした。また、耕地整理の実施には農商務省(大臣)の発起、施行等の認可が必要とされ、大量の書類の作成が必要となった。

埼玉県は明治33年に農事試験場を設立し農業研究と指導を強化した^{註3-1}。松尾幸太郎が農事試験場に技手として就任した。松尾はその後技師に昇進した。松尾は埼玉県農会の嘱託技手、幹事を兼任し、鴻巣常光耕地整理に参画した。また、埼玉県は明治34年に耕地整理費補助規則を制定し、工事が終了し、成功した耕地整理に対し、旧反別1反歩に付き金2円以内の補助金を交付することとし、耕地整理推進政策をとった。

埼玉県農会は明治31年5月に設立された。埼玉県農会は明治32年度に会員3名、明治33年度に会員2名を静岡県、石川県に派遣し、耕地整理の実地調査にあたらせた^{註3-2}。松尾は明治32年度に派遣された。その結果等もあり、耕地整理を農事改良上の適切な事業と決定した。耕地整理の利益と実施手続きを解説した『埼玉県農会特別報告』を刊行配布し、また、農会報、講話会等でも耕地整理を誘導奨励した。第2に、埼玉県農会は明治33年に耕地整理補助規程を定め、測量設計の補助、測量器械の無料貸与と測量技手の派遣等の補助を実施することとした。農会は測量器械を購入し、測量技手職を設け、吉居平一が明治34年に就任し、鴻巣常光耕地整理に参画した。

埼玉県、県農会は模範耕地整理として耕地整理の実施を誘導奨励したが、埼玉県で最初に北埼玉郡太田村大字小針(現行田市)の約60町の耕地整理が明治34年6月から工事され、耕作の為中断後完成し、成功した。この耕地整理には10間×30間、300歩、1反歩の水田等鴻巣式耕地整理方式が採用された^{註3-3}。松尾、吉居はこの耕地整理に参画した。北足立郡の関心もつ人々も隣郡のこの耕地整理を実地観察したと推測される。

北足立郡政府、北足立郡農会は耕地整理を積極的に誘導奨励した。特に、早川光蔵北足立郡長、郡農会長は鴻巣常光耕地整理の実現、整理地区外の反対者との調停、斡旋に陰に陽に活躍した。早川郡農会長は明治33年に静岡県、翌34年3月に京都府、石川県等に派遣され、耕地整理の実施調査を行った。その結果等にもより、耕地整理を郡農会の一大事業と決定した。郡農会は耕地整理に関する『本会特別報告』を刊行配布し、講話会を開催し、耕地整理の実現を積極的、強力に誘導奨励した。

早川は埼玉県北埼玉郡三俣村(現加須市)に農家の次男として生まれ、幼少期から家業の農家に従事し、また独力で勉学に励んだ。その後、教員を経て埼玉県の衛生課、学務課等を経験し、明治30年に北葛飾郡長に栄進し、30年12月に北足立郡長に昇進した^{註3-4}。郡長は大正15年郡役所廃止以前には郡内の水利土功会と普通水利組合の管理者であった。早川は見沼代用水路についても八間堰枠(明治34年度)と十六間堰枠(明治35年度)の代替、元圀樋管の改造等の業績をあげた^{註3-5}。早川は鴻巣常光耕地整理地区の近くに生まれ整理地区の実情を理解でき、農業の経験を有し、水利についての知識があった。早川は事務、行政経験も充分だったと思われる。早川は明治35年当時50才代中頃であり最盛期にあったと思われる。

橘金太郎は郡技手であり、郡農会主任技手、幹事を兼務していた。

4 耕地整理の発端から発起届書提出^{注4-1} (明治33年10月―34年5月)

鴻巣町と常光村の一部の人々は耕地整理への関心をもっていたが、耕地所有者が自主的に耕地整理を発起、実施する状況にはなかった。鴻巣町農会は土質改良を目標の1つとした。しかし、「……斯業ニ関スル耕種ノ改良方法ヲ誘掖奨励シ土質改良ヲ唱導スルコト歳余然リト雖モ農家因襲ノ久シキ旧慣ヲ脱セス容易ニ其目的ヲ達セサリシ……^{注4-2}」。また、常光村においても「……有志相謀リ明治二十七年ノ項田区改正ノ実施ヲ鼓吹セント雖モ農家進取ノ氣象ニ乏シク荏苒時日ヲ経過シテ益々困難ノ域ニ達シ……^{注4-3}」という状況であった。

埼玉県、北足立郡政府と県農会、郡農会は明治33年頃より耕地整理の実施への誘導奨励を強力に推進し始めた。農商務省竹内技手の講話会が明治33年10月15日に北足立郡役所で開かれた。鴻巣町農会は会員を糾合して聴講させた。次いで、10月17日に農商務省竹内技手の講話会を鴻巣町で開いた。これらの講話会が鴻巣常光耕地整理の発端、導火線となったと言われる。その後、県郡農会

第4-1表 鴻巣常光耕地整理

	耕 地 整 理 以 前				耕 地 整 理 後		
	面 積 (町歩)	地 価 (円)	筆 数 (筆)	一筆平均面積 (歩)	面 積 (町歩)	筆 数 (筆)	一筆平均面積 (歩)
田	244.0309	111,110	3,905	607	246.2805	2,529	921
畑	103.4528	15,351	1,604	613	95.9805	1,452	618
宅 地	17.0125	4,831	181	903	16.9729	183	909
山 林	2.1321	84	49	412	2.0613	47	412
原 野	1313	2	3	414	1102	3	320
藪 地	321	1	5	22	301	6	15
小 計	366.8127	131,380	5,747		361.4425	4,230	
畦 畔	7321				(他に合算) ^{注2}		
道 路	8.2612				16.7018		
溝 渠	7.4319				7.5829		
土揚敷	1607				0		
堤 塘	3.4229				1.1013		
荒蕪地	306				306		
芝 地	819				815		
小 計	20.1422				25.5125		
総 計	386.9620	131,380	5,747		386.9620		

注1：面積は町反畝歩で表わされている。0.0030 = 0.01

注2：他に合算と推定。

資料：『埼玉県北足立郡事一班』 pp. 154、155。

技術者を招き講話会を数回開催した。

鴻巣町農会は10月22日に一般土地所有者を召集し耕地整理の実施を論議したが、実施決定には至らなかった。11月22日頃^{註4-4}に再度土地所有者集会を開催し、耕地整理実施を決議した。また、発起人を選び、同意証を作成し、土地所有者を毎戸訪問し、耕地整理への賛成、同意証への署名捺印を積極的に開始することを決定した。

鴻巣町の耕地整理の発起、実施を強力に推進し、一般土地所有者を誘導したのは鴻巣町農会、町農会に集まった有力指導者であった。「……偶々耕地整理法ノ發布アルヲ以テ益々誘導怠ラサル結果漸ク機熟シテ茲ニ整理施行ノ議稍々纏マリ地主ノ会合ヲ見ルニ至レルハ同町農会幹旋ノ効与シテカアル所ナルヘシ^{註4-5}」と述べられている。

常光村の耕地整理の発端は、明治33年12月19日に村内共有館に土地所有者の集会を催し、郡農会の技術者を招き講話会を開いた。その後、常光村でも数回講話会を開催し、土地所有者の耕地整理の理解を進めた。土地所有者は耕地整理の実施を決議し、発起人を選び、同意証を作成し、毎戸訪問し同意をえる運動を始めた。

鴻巣町と常光村の土地所有者はそれぞれ独立に耕地整理を実施する予定であった。しかし、県農会の技術者の実地調査により、鴻巣町と常光村の連合耕地整理の必要が認められた。鴻巣町と常光村の水田の用悪水路が密接に連係していること、特に町村の境界の高丘（鴻巣加須道）の悪水路の滞水問題の解決には連合耕地整理による悪水路の根本的改修が必要であること等の理由によった。それ故、「……県及郡農会ニ於テハ連合ノ議ヲ勧誘幹旋セシ……^{註4-6}」。用水の争論を行い、公務上および私交上の円満良好な関係を欠く両町村の連合は、政府と農会の強力な影響力なしに短期間にはほとんど不可能と考えられる。

その結果、両町村の土地所有者も連合耕地整理の利益を悟り、明治34年5月12日に、双方の耕地整理の発起人が鴻巣町農会事務所に集会を開き、正式に鴻巣町常光村連合耕地整理の実施を決議した。なお、中丸村大字深井も用悪水路の密接な連係により、鴻巣常光耕地整理に連合し参加した。

鴻巣町常光村連合耕地整理の土地所有者452人、総面積380町4反4畝23歩、地価総額約13万8千8百円であった（第4-2表）。

整理地区の種目別面積、地価等が第4-1表である^{註4-7}。田が約244町、総面積の約63.0%を占め、畑が約103町、約26.6%を占めていた。したがって、耕地が総面積の約89.7%を占めている。また、田の地価が約11.1万円、総地価の約84.7%、畑の地価が約1.5万円、約11.5%を占めていた。したがって、耕地が総地価の96.2%を占めていた。

鴻巣常光耕地整理の発起人、代表石田正、外31名は、348名の土地所有者の連署捺印された鴻巣常光耕地整理の同意証を添付し、明治34年5月10日付けの鴻巣常光耕地整理施行の発起届書を5月12日頃に⁴⁻⁸提出した。

鴻巣常光耕地整理の同意者の統計が第

第4-2表 鴻巣常光耕地整理同意者不同意者

	同 意 者	不同意者	総 計
土地所有者(人)	348	104	452
構成比(%)	77.0	23.0	
面 積 (町)	328.95	51.49	380.45
構成比(%)	86.5	13.5	
地 価 (円)	116,816	22,018	138,834
構成比(%)	84.1	15.9	

注：土地台帳によると推定される。

資料：松尾幸太郎他編『施行方法説明書』pp. 78、79。

4―2 表である。同意土地所有者が総土地所有者の約 77.0%、過半をかなり大きく上回っている。不同意者には耕地整理の成功、特に用悪水路の改修による灌漑排水問題の解決を疑問視する土地所有者と経済的に困難な状況にあった土地所有者がいたことは想像される。同意土地所有者の平均面積 0.95 町、平均地価 336 円に対し、不同意土地所有者の平均面積 0.50 町、平均地価 221 円であった。したがって、比較的小規模土地所有者が不同意であったと言える。

なお、鴻巣常光耕地整理の費用は多額であり、多額の借入が必要とされると予想された。当時耕地整理法、日本勧業銀行法、農工銀行法により、これらの銀行からの耕地整理費用の借入には土地所有者全員の連署が必要とされた^{註4-9}。それ故、耕地整理成功を疑問視する、また、経済的困難な土地所有者は一層耕地整理に同意しなかったと推測される。それ故、鴻巣常光耕地整理に対する約 7 ヶ月間の短期間での大多数の土地所有者の賛成、同意証への連署捺印は驚くべきことである。

鴻巣町常光村連合耕地整理は県郡政府とそれらに連携した県郡農会の強力な誘導奨励により発起したと言える。また、鴻巣町農会、その有力者がそれらの誘導奨励に積極的に対応し、一般土地所有者を説得、勧誘したことにより、また常光村が独立して企画し合同し、鴻巣町常光村連合耕地整理の発起が実現したと言える。なお、当時の町村農会は任意加入組織であり、有力な地主、農家が中心の組織であった。

鴻巣常光耕地整理に発起人および整理委員として特に貢献、活躍した人々として、石田正（鴻巣町長、町農会長、発起人代表、整理委員長）、矢部徳太郎（常光村長、村農会長、副整理委員長）、松谷正兵衛、渡辺与吉、深井源吾、松村政五郎、矢部伊太郎があげられている^{註4-10}。

石田正鴻巣町長、町農会長は明治 22 年市町村制の実施時に町長になり、明治 23 年当時郡長より埼玉県属（明治 12 年 11 月―14 年 9 月）を勤め事務経験あり、相応の学識あり、また名望有、財産下と評価された^{註4-11}。石田はその後大正 5 年に病をえて辞職するまで町長を務めている。また、石田は耕地整理以前に埼玉県農会の参事（明治 31、32 年度）、評議員（明治 31―35 年度）を務め、耕地整理当時広く活躍していた。石田の業績の一部として宮地堰改良樋管の竣工と鴻巣常光耕地整理があげられている。矢部徳太郎常光村長は明治 22 年村長となり、明治 23 年当時郡長より明治 12 年以来戸長筆生等を務め事務経験あり、「敏活ナル治務ニ当ル克ハサルも当村地方ノ民情ニ比ヘ先ツ其任ニ適当ナル……^{註4-12}」と、また名望有、財産中と評価されている^{註4-13}。矢部は明治 35 年当時既に約 12 年の村長として経験を有していた。松谷正兵衛は明治 23 年当時郡長より名望有、財産上と評価されている^{註4-14}。渡辺与吉は同様に名望有、財産と評価されている^{註4-15}。

また、明治 23 年当時郡長より鴻巣町行政は三等級評価で一等、常光村行政は二等と評価されている^{註4-16}。

5 発起届書提出から発起認可申請^{註5-1} (明治 34 年 5 月―11 月)

鴻巣常光耕地整理の発起人は発起届書の提出後、耕地整理の実施へ向け、県郡農会の補助を受け、測量設計、規約書作成等を本格化させた。また、農商務省（大臣）への発起認可申請に向け、申請書類の作成を始めた。

県農会は農科大学乙科農科卒の松尾幸太郎技手と吉居平一技手を鴻巣常光耕地整理に参画させ、

補助指導させた。松尾技手は指導的技術者として全般的な耕地整理の指導を担当した。吉居技手は測量を担当した。また、郡農会は橘金太郎主任技手を参画、補助させた。橘技手は設計および手続上の書類作成の総てについて指揮監督をした。

発起人は県農会へ耕地整理補助規程により鴻巣常光耕地整理地区の測量設計補助願を提出した。県農会は吉居技手を派遣し鴻巣常光地区整理地区の測量を行った。吉居技手は県農会の測量規定により定められた方法で、無料貸与された県農会の測量器械で測量を実施した。平面測量、高低測量が実施され、また水路の流量測量が実施された。また、工作物調査、道路調査、重要な水路の水流調査も実施された。したがって、測量は伝統的な道具と方法でなく、近代科学に基礎をおく科学的方法と器械によっていたことが注目される。

発起人は明治34年6月24日に埼玉県に耕地整理費補助規則に基く補助申請書を提出した。また、発起人は明治34年8月19日に鴻巣常光耕地整理地区の国有地の国有地編入認許申請書を各主務官庁に提出した。

鴻巣常光耕地整理の設計、用水路と悪水路、耕作道等の設計と水田、小用水路、小悪水路、耕作道等の基本的区画（レイアウト）設計が測量に基づき進められたと思われる。鴻巣常光耕地整理の設計は主として県農会技手によって立案作成されたと推定される。地元の土地所有者は近代科学的農業土木技術知識を欠いていた。水田等基本的区画に明治33年実施の太田村耕地整理に採用された10間×30間、1反歩の水田等、鴻巣式耕地整理方式が採用されたこと等から推定される^{註5-2}。

また、鴻巣常光耕地整理の規約書の作成についても農会技手の指導を受けたが、規約書については発起人が費用負担、換地配分等についてかなり自主的に作成したと推定される。

規約書と設計の作成の経過については詳細には判明しない。但し、「比の間設計規約の変更をなすこと都合四回にして、……^{註5-3}」と、約30年後の著書に表現されていることから、規約書と設計の作成に苦心したことが推定される。

鴻巣常光耕地整理の発起人は代表石田正、外31名の連署をもって明治34年11月24日付で農商務省（大臣）に発起認可申請書を提出した。土地地目別面積地価筆数等からなる申請書に、土地所有者の同意証、設計書、規約書が添付されていた。また、大塚堰撤去承認書（常光村議会の決議を経て村長が承認）が添付されていた。なお、設計書は整理ニ因リテ得ヘキ利益、工事ノ要領、起工ノ順序、整理地区及之ニ隣接スル土地ノ現形図と整理予定図、工事仕様書、工事着手及竣成時期、整理費用予算書からなる。

鴻巣常光耕地整理の規約書は30条よりなる。その主要点を紹介する（以下の各章で規約書を基に分析を行う）。第1に、参加土地所有者の3分の1での総会の開会、出席参加土地所有者の議決権の過半数での決議を定めている。第2に、整理委員は50名とし、委員長と副委員長を互選すること、庶務掛、工事掛、会計掛の三種の事務を分掌することを定めている。第3に、測量と工事に関して整理地区を町村境界で鴻巣区と常光区に分区し、測量と工事の経費を各区の参加土地所有者で負担すると定めている。そして、整理費用は水田従前面積に賦課すると定めている。第4に、換地は従前の土地の種目面積等位等を標準として各参加土地所有者毎になるべく取纏めて交付すると定めている。第5に、整理予算の2万円は3ヶ間定期償還の方法で整理委員の連帯責任をもって借入することを定めている。鴻巣町常光村連合耕地整理は総会等は統合されているが、測量および工事に町村の分区を行い、これらの費用分担等にも分区が認められていたことは注目される。

鴻巣常光耕地整理の目的（整理ニ因リテ得ヘキ利益）は耕作ノ便利ヲ益ス、土地改良ノ目的ヲ達スヘシ、収穫ノ増加ヲ見ルヘシとされていた。但し、「灌漑排水ノ便ヲ善クシ土地ノ改良ヲ図ル^{註5-4}」ことが最大の目的であったと言える。

鴻巣常光耕地整理の設計、用水路、悪水路等の設計、道路の設計と水田、小用水路、小悪水路、耕作道等の基本的区画設計を簡単に紹介する。

灌漑排水施設については徹底的な改善が企画された。第1に、用水路と悪水路が完全に専用目的に分離された。大用水路は新谷田用水路、外谷用水路と子守堀用水路となった。また、大悪水路は悪水専用に改修された。第2に、用悪水路は近代的科学による測量に基づき勾配（傾斜）が設計され、それらの幅員と高低は近代的科学による流量推計に基づき設計された^{註5-5}。

新谷田用水路は谷田用水路に代わり、新たに掘鑿したものである。但し、宮地堰から取水し、大破した二ツ樋に代わる新設された樋管を通過して耕地整理地区の西北端に流入し、地区の西部の鴻巣町、常光村の水田を灌漑し、地区外の中丸村へ流出した^{註5-6}。したがって、地区への流入（始発点）と地区外への流出（最終点）は谷田用水路と同一で不変であり、地区内の用水路が新たに掘鑿し改良された。外谷用水路が新たに掘鑿された。外谷用水路は新谷田用水路からその始発点から約50間で分流し、耕地整理地区の北部を流れ、北部の水田を灌漑し、子守堀用水路に合流した。子守堀用水路はほぼ旧用水路であるが、改良、改善された。特に掛樋で悪水路を越え、悪水路の大塚堰、上堰が撤去された整理地区外南方の大字常光、加納村の水田にも灌漑することとした。また、注目されるのは、新谷田用水路、外谷用水路に沿う九尺の道路を隔てて、上巾三尺の副用水路を設け大用水路から用水を受け小用水路を経て水田へ灌漑することとしたことである。これは整理地区内での過剰用水を防ぎ、下流への用水を確保することを目的とした。

大悪水路は悪水専用とされ、整理地区の西北端に新設された樋管を通過して流入し、以前のように分流、合流せず中央部をほぼ直線的に貫流し元荒川に流出する。この大悪水路は町村境界の高丘（鴻巣加須道）を含め、ほぼ一定の勾配に新掘され、大塚堰と上堰は撤去された。

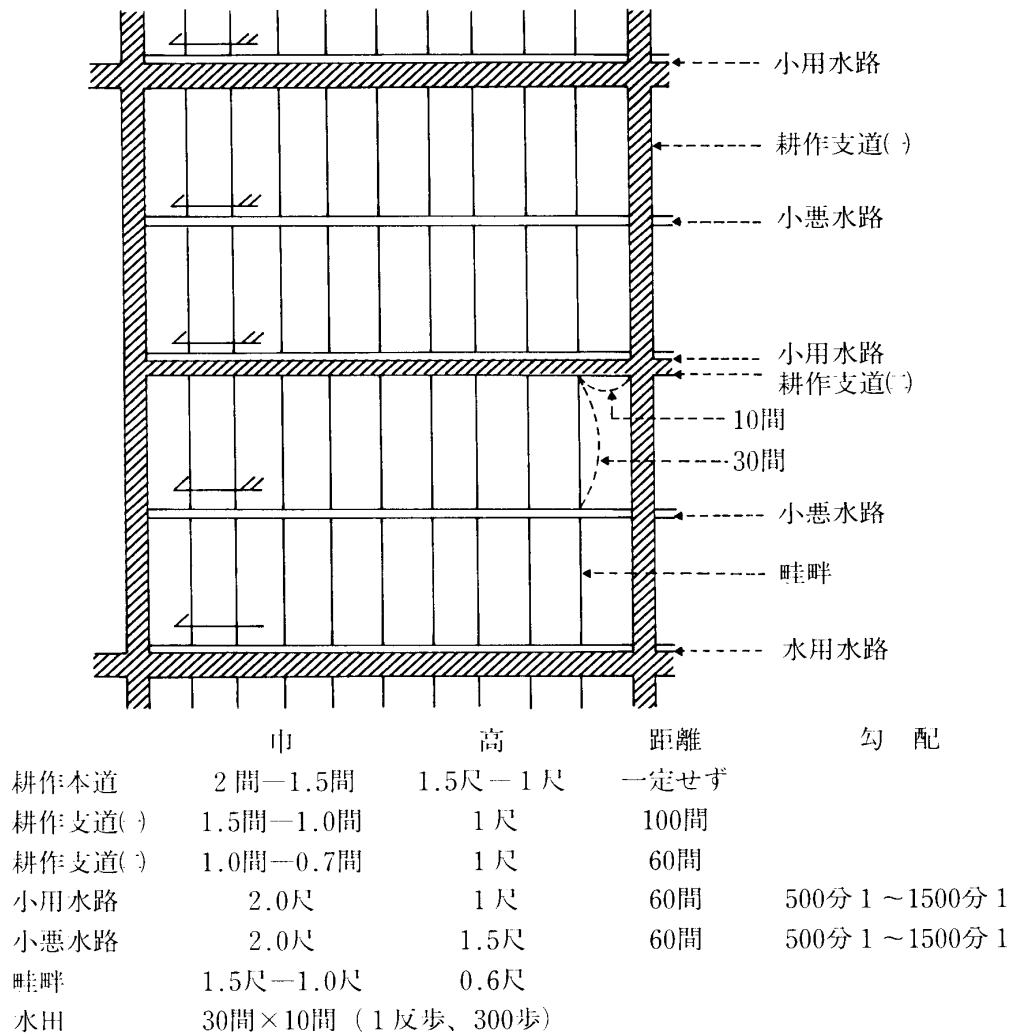
また、整理地区内の周辺部の人家、田、畑の錯雑した地域には中用水路と中悪水路を新設し、また小用水路と小悪水路を新設した。

耕地整理地区内の2県道はそれらの道程の改善には多額の費用を要すると予想される理由により変更せず、両側に小水路を副え幅員の一定化を図った。2町村道はゆるい曲線化、直線化が図られ2間の路面に側溝を設けた。また、耕地地域には耕作本道が利便の必要に応じ設けられた。

鴻巣常光耕地整理の基本的区画（レイアウト）、鴻巣式耕地整理方式を簡単に紹介する（第5-1図参照）。

耕作支道（一）を縦に100間毎に平行に設ける。耕作支道（二）を横に60間毎に平行に設ける。小用水路を60間毎に平行に横断する耕作道（二）に沿い設ける。小悪水路を小用水路と同方向に60間毎に平行に設ける。したがって、小用水路と小悪水路とは同方向に30間毎に交互に平行に設けられた。横断する小用水路（耕作支道（二））、小悪水路と縦断する耕作支道（一）に囲まれた100間×30間の区画ができる。この区画を10間×30間、300歩、1反歩の水田10枚に畦畔により分割する。したがって、各水田は耕作支道、小用水路、小悪水路とに面し、それらを使用、利用可能である（耕作支道等の巾、高等は第5-1図を参照）。

また、耕地整理地区の設計には、この基本的区画、鴻巣式耕地整理方式がほぼ厳格に保持され、



注：—はまたはを示す。～はないしを示す。

資料：『日本農業発達史第1巻』p. 220、但し追加している。

第5—1図 基本的区画（レイアウト）

画一的に設計された（鴻巣常光耕地整理地区の設計、鴻巣式耕地整理方式の評価は後章において分析する）^{注5-7}。

工事仕様書には各工事に要する工事仕様が記述されかつ工事費用は22,468,227円と推計された。また、工事は「施行認可ヨリ五週間以内ニ着手^{注5-8}」し、「着手ヨリ二ケ年間ニ竣成^{注5-9}」とされた。整理費用予算は25,422,375円とされた。この整理費用予算は総地価額の約18.3%にあたった。

鴻巣常光耕地整理は、総会による承認が必要とされるが、規約書および設計書が作成されたことで実質的にその内容が決定されたと言える。耕地整理の発起人32名が、農会技術者の補助、指導を受け、鴻巣常光耕地整理の規約書、設計書を実質的に決定した。一般土地所有者にはそれらの実質的な討議への参加については不明であるが、公式な意見の表明の機会がほとんどなく、まして耕地整理反対者には意見の表明の機会がほとんど保障されなかったと思われる。

6 整理地区外の反対から発起認可^{注6-1} (明治34年11月―12月)

鴻巣常光耕地整理に対し整理地区外から3件の反対、苦情が発生した。3件は鴻巣常光耕地整理の用悪水路の改修に関係した反対であった。反対は重大であり、それらの解決、調停の成立を待ち鴻巣常光耕地整理の発起認可が発行されたと推定される。

第1の反対は元荒川から取水していた笠原村と屈巢村の鴻巣常光耕地整理の用悪水路の改修による元荒川からの取水増加の心配による反対であった。この反対は想像にすぎず鎮静した。

第2の反対は谷田用水路の整理地区外下流の常光村大字常光、加納村、中丸村の水田所有者により発生した。反対者は鴻巣常光耕地整理により、二ツ樋の新しい樋管への改修と谷田用水路の新谷田用水路への変更、新堀により整理地区外下流の用水不足、欠乏の一層の重大化が結果すると考え、心配し鴻巣常光耕地整理に強力に反対運動を行った^{注6-2}。反対者は鴻巣常光耕地整理の設計が明らかになった頃から反対運動を始め、大字を基礎にして、また村として反対運動を展開した。反対者は反対運動方針、運動費用の各大字負担割合(比率)、県郡政府への陳情の旅費、各大字の代表委員数等を定めた約定書^{注6-3}を結び、代表者を選出し、組織的に反対運動を実施した。反対者は鴻巣常光耕地整理の発起人との協議を求め、また、県郡政府に数十回に及ぶ陳情を行った。

県郡政府と県郡農会は、特に早川郡長、郡農会長は慰諭、調停活動を行った。その結果もあり、両者間に「新谷田用水ニ関スル約定書」が明治34年12月26日に結ばれ、反対運動は終息した^{注6-4}。

農商務省(大臣)は明治34年12月28日に鴻巣常光耕地整理の発起認可書を発行した。この発起認可書の発行は谷田用水路の変更の反対運動の解決を待ち、行われたと推定される。この反対運動が鴻巣常光耕地整理の明治35年正月早々の工事着手の予定が3月15日に遅延した^{注6-5}重要な原因と推定される。

第3の反対は整理地区内の悪水路の大塚堰から始まる用水路による整理地区外南方の大字常光等の水田の灌漑に代え、子守堀用水路から大悪水路を越える掛樋を新設し南方の水田に灌漑することに対する反対である。大塚堰の撤去については発起認可申請以前に既に常光村議会で決議され、矢部徳太郎村長の承認をえていた^{注6-6}。しかし、大字常光の樋口三平と河野茂三郎を指導者とする反対者は県郡政府への数十回の陳情、弁護士への法的研究の依頼等強硬に反対運動を展開した。特に、「……創業總會ニ二百余人ヲ組立テ会場ニ押立テタル光景恰モ往古ノ百姓一揆トカ疑ハレ事態容易ナラサリシ……^{注6-7}」という状況であった。

樋口三平は明治23年当時郡長より名望有、財産下と評価されていた^{注6-8}。また、産業上の功勞により埼玉県知事より表彰を受けた。ちなみに、明治35年以前の埼玉県の産業上の功勞による農商務大臣表彰者2名、県知事表彰者は8名であり、鴻巣町と常光村では他にいない^{注6-9}。また、河野茂三郎は明治23年当時郡長より名望無、財産中と評価されていた^{注6-10}。したがって、この反対は鴻巣常光耕地整理の実施に対する重要な反対であったと判断される。その後、反対者は農商務省、県郡政府への陳情等を継続した。そこで、中丸村の有力者大島新助が仲裁の勞を取り、第2回創業總會以前に^{注6-11}、耕地整理の発起人と反対者の間に和議が成立した^{注6-12}。早川郡長、郡農会長も積極的に説得、慰諭を行った。

鴻巣常光耕地整理の実施には用悪水路の関連する整理地区外との水利権を調整し、整理地区外の

人々に最小限旧水利権を保障することが必須の前提であった。また、当事者の交渉では解決できず外部の有力者、政府と農会の指導斡旋、仲裁が有効であったことが注目される。

〔以下次号〕

本論文は筆者の Wye College (University of London) の在外研究 (1995 年 9 月—1996 年 8 月)、開発経済論特に水資源経済学と灌漑経済学研究に始まり、帰国後発展した成果である。資料収集に両角和夫氏 (農業総合研究所) の援助を受けた。記して感謝する。

注

注2 — 1 本章は松尾幸太郎他編『埼玉県北足立郡鴻巣町常光村連合耕地整理施行方法説明書 (以下、施行方法説明書と省略)』に全面的による。本資料 (史料) は鴻巣町常光村連合耕地整理に参画、補助指導した県郡農会技手により編著されている。したがって資料批判が必要とされるが現在他に資料がなく不可能である。慎重な取り扱いが必要とされる。

注2 — 2 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 2。

注2 — 3 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 5。

注2 — 4 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 6。

注2 — 5 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 7。

注2 — 6 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 5。

注2 — 7 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 23。

注2 — 8 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 7。

注2 — 9 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 23。

注2 — 10 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 25。

注2 — 11 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 7。

注3 — 1 埼玉県と県農会の農業技術政策については埼玉県『新編埼玉県史 通史編 5』pp. 840-860 第四章第三節—農業技術の改良と農業団体を参照されたい。また、本章の県郡と県郡農会の耕地整理政策は主として松尾幸太郎他編『施行方法説明書』による。

注3 — 2 埼玉県農会『埼玉県農会沿革並事業成績』pp. 25, 26。

注3 — 3 埼玉県農会『埼玉県農会報』第13号 (明治35年2月) pp. 49, 50。

注3 — 4 加須市史編さん室『加須市史別編人物誌』pp. 97, 98による。早川は大正4年まで18年の長期にわたり北足立郡行政を担当し勝れた業績をあげ、県内郡長の中でも特に一ヵ所に長く在任し名郡長の名をほしいままにした。

注3 — 5 渡辺一郎『見沼土地改良区史』p. 917。

注4 — 1 本章は松尾幸太郎他編『施行方法説明書』に全面的による。注2—1を参照。

注4 — 2 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 24。

注4 — 3 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 25。

注4 — 4 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』pp. 77, 78の発起届書の同意証の署名捺印の期日から推定される。

注4 — 5 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 24。また、金沢貞次郎『鴻巣町史』p. 171には「本会 (鴻巣町農会—筆者) の事業として最も努めしは明治三十三年の耕地整理にして殆んど本会の発起主催に依って全国に卒先し斯の大業を起せしもの特筆するに足る」と述べられている。

注4 — 6 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 26。

- 注4 ― 7 鴻巣常光耕地整理の面積、地価等は各資料により多少異なる。後章でとり上げる。
- 注4 ― 8 鴻巣常光耕地整理実施の決議された5月12日頃と推定される。
- 注4 ― 9 農商務省農務局『耕地整理事例 第1輯』p. 21による。
- 注4 ― 10 農商務省農務局『耕地整理事例 第1輯』pp. 20, 21による。
- 注4 ― 11 「北足立・新座郡町村行政事務現況取調進達」『鴻巣市史 5』p. 577とp. 575による。
- 注4 ― 12 「北足立・新座郡町村行政事務現況取調進達」『鴻巣市史 5』pp. 576, 577。
- 注4 ― 13 「北足立・新座郡町村行政事務現況取調進達」『鴻巣市史 5』p. 575による。
- 注4 ― 14 「北足立・新座郡町村行政事務現況取調進達」『鴻巣市史 5』p. 575による。
- 注4 ― 15 「北足立・新座郡町村行政事務現況取調進達」『鴻巣市史 5』p. 575による。
- 注4 ― 16 「北足立・新座郡町村行政事務現況取調進達」『鴻巣市史 5』pp. 573, 574による。
- 注5 ― 1 本章は松尾幸太郎他編『施行方法説明書』にほぼ全面的に依っている。注2―1参照。
- 注5 ― 2 埼玉県農会『埼玉県農会報』第13号(明治35年2月)pp. 49, 50による。
- 注5 ― 3 金沢貞次郎『鴻巣町史』p. 135。
- 注5 ― 4 農商務省農務局『耕地整理事例 第1輯』p. 4の鴻巣常光耕地整理の目的として、これが唯一あげられている。
- 注5 ― 5 但し、上野英三郎『耕地整理講義』p. 280において流量推計は余裕を欠き過少であると批判された。当時近代的推計方法がまだ確立されていなかったと思われる。
- 注5 ― 6 「宮地堰改良工事規約書」『北本史 5』pp. 177, 178によれば、鴻巣町、常光村と中丸村は明治34年10月に同規約を結び、大破した二ツ樋に代わる樋管の新設と谷田用水路の権利を確認している。後にこれらをめぐり反対論が発生した。次章参照。
- 注5 ― 7 上野英三郎『耕地整理講義』pp. 279, 283において、鴻巣常光耕地整理の評価、批評を行っている。また、横井時敬『経済側の耕地整理』において画一的設計を厳しく批判している。
- 注5 ― 8 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 101。
- 注5 ― 9 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 101。
- 注6 ― 1 本章は松尾幸太郎他編『施行方法説明書』に全面的に依っている。注2―1参照。
- 注6 ― 2 「谷田用水変更につき陳情書」『鴻巣市史 6』pp. 189-191による。また、注5―6を参照されたい。
- 注6 ― 3 「谷田用水変更につき陳情書」『鴻巣市史 6』pp. 191-194による。
- 注6 ― 4 この反対運動とその決着は伝統的な水利権をめぐる伝統的、合法的な反対とその決着と判断される。
- 注6 ― 5 埼玉県農会『埼玉県農会報』第15号(明治35年4月)p. 40による。
- 注6 ― 6 農商務省(大臣)への発起認可申請書に大塚堰撤去承認書が添付された。
- 注6 ― 7 松尾幸太郎他編『施行方法説明書』p. 30。
- 注6 ― 8 「北足立・新座郡町村行政事務現況取調進達」『鴻巣市史 5』p. 575による。
- 注6 ― 9 埼玉県農会『埼玉県農会沿革並事業成績』pp. 22, 23による。
- 注6 ― 10 「北足立・新座郡町村行政事務現況取調進達」『鴻巣市史 5』p. 575による。
- 注6 ― 11 第2回創業総会での反対運動、工事妨害が記されていないことから推定される。
- 注6 ― 12 和議の条件は不明である。なお、この反対運動は大塚堰の撤去については常光村議会で決議されており、合法性を持っていなかったと判断される。

文 献

- [1] 今村奈良臣、佐藤俊郎、志村博康、玉城哲、永田恵十郎、旗手勲 『土地改良百年史』，平凡社，1977.
- [2] 金沢貞次郎 『鴻巣町史』，鴻巣商工会，1932.
- [3] 加須市史編さん室 『加須市史別編人物誌』，埼玉県加須市，1984.
- [4] 北本市教育委員会生涯学習課市史編さん室 『北本市 5 近代・現代資料編』，埼玉県北本市，1988.
- [5] 鴻巣市市史編さん調査会 『鴻巣市史 資料編 5 近代・現代一』，埼玉県鴻巣市，1991.
- [6] 鴻巣市市史編さん調査会 『鴻巣市史 資料編 6 近代・現代二』，埼玉県鴻巣市，1995.
- [7] 松尾幸太郎、橘金太郎、吉居平一編 『埼玉県北足立郡鴻巣町常光村連合耕地整理施行方法説明書』，埼玉県北足立郡鴻巣町常光村連合耕地整理事務所，1903.
- [8] 農商務省農務局 『耕地整理事例 第1輯』，1907.
- [9] 日本農業発達史調査会 『日本農業発達史 第1巻』，中央公論社，1953.
- [10] 埼玉県 『新編埼玉県史 資料編 21 近代・現代 3 産業経済 1』，1982.
- [11] 埼玉県 『新編埼玉県史 通史編 5 近代 1』，1988.
- [12] 埼玉県北足立郡農会編 『埼玉県北足立郡事一班』，1909.
- [13] 埼玉県農会 『埼玉県農会報』，第13号（明治35年2月），第15号（明治35年4月），第25号（明治36年2月）.
- [14] 埼玉県農会 『埼玉県農会沿革並事業成績』『埼玉県農会報』第25号（明治36年2月）付録.
- [15] 東畑精一 『日本農業の展開過程』，岩波書店，1936.
- [16] 上野英三郎 『耕地整理講義』，成美堂，1905.
- [17] 渡辺一郎（見沼土地改良区理事長） 『見沼土地改良区史』，埼玉県浦和市，1988.
- [18] 横井時敬 『経済側の耕地整理』，成美堂，1921.